

武田佐知子 編

交錯する知

衣装・信仰・女性

思文閣出版

序

この論文集は、大阪大学大学院文学研究科教授、武田佐知子先生のご退職を記念して編まれたものである。

先生は早稲田大学文学部をご卒業後、同大学院文学研究科、東京都立大学大学院人文科学研究科に進学され、一九八五年、大阪外国語大学外国語学部助教授に就任された。一九九七年には教授に昇任され、二〇〇七年からは、大阪大学大学院文学研究科教授となられ、大阪大学理事・副学長の重責も担われた。多くの学生の教育と後身の育成につとめ、大学の発展に尽くされ、二〇一四年三月に定年を迎えられることになった。

先生のご専門は日本古代史で、衣服制の問題を身分標識や東アジアの国際関係の観点から捉え直す研究から出発された。その後、道路をめぐる空間認識論、衣服を軸にしたジェンダーの歴史的研究、図像研究、そして日本文化論など、幅広い問題に関心をもたれ、各分野で成果をあげておられる。

学説史上もとても大きな業績の一つは、古代衣服制の研究である。最初のご著書、『古代国家の形成と衣服制——袴と貫頭衣——』（吉川弘文館、一九八四年）は、衣服制が身分制の現象的形態であると同時に、社会構造に対して働きかけ、歴史の推進を担う主体でもあるという視点に立ち、衣服制の形成を東アジア世界における国家形成の指標の一つとして捉えるべきことを提起された。そのなかでは、正倉院文書の「籍帳」の身体特徴注記を分析して、農民の衣服形態を明かすなど、きわめて斬新な研究を試みられ、一九八五年度サントリー学芸賞を受賞された。

先生は、その後、衣服制の分析をさらにすすめられるとともに、聖徳太子信仰や一遍聖絵の問題解明に着手された。『信仰の王権 聖徳太子——太子像をよみとく——』（中央公論社、一九九三年）、『衣服で読み直す日本史

——男装と王権——（朝日新聞社、一九九八年）、『一遍聖絵を読み解く——動き出す静止画像——』（編著、吉川弘文館、一九九九年）、『太子信仰と天神信仰——信仰と表現の位相——』（編著、思文閣出版、二〇一〇年）、『着衣する身体と女性の周縁化』（編著、思文閣出版、二〇一二年）、などを世に問われた。これらの研究業績により、一九九五年度の濱田青陵賞を受賞され、二〇〇三年には紫綬褒章を受章された。

先生は母思いの人でもあった。『娘が語る母の昭和』（朝日新聞社、二〇〇〇年）は、激動の昭和の時代を生き抜いた母の姿を生き生きと描き、大きな話題を呼んだ。『虹の橋がかれ——武田道子書・歌遺作集——』（嵯峨野書院、一九九七年）は、母の残した日記や書を、日本女性のライフヒストリー復元の視点から編集されたもので、母を客観的に見つめ直そうとする娘の姿が垣間見られる。

この論文集は、そうした武田先生の歴史学の魅力と、お人柄にひかれた者たちによって作られた。まず先生ご自身に、「平安貴族における愛のかたちと衣服のかたち——『とりかえばや』の復権——」という巻頭論文を書いていただき、本書全体を厚みのあるものにできた。そのほかの執筆者は、大学の同僚のほか、学会活動や研究会を通じた研究者仲間、そして大阪外国語大学や各地の大学で先生のご指導にあづかった教え子たちである。

寄せられた三一本の論考は、多彩な内容になった。日本に関連する分野では、古代から現代にいたる歴史、文学、絵画、習俗、信仰などがあつかわれている。海外・異文化交流の分野では、中国・琉球・東南アジアなどのほか、スペイン・イタリア・スウェーデンなどの政治・文化現象が分析対象となっている。また執筆者の専門分野は、歴史学のみならず、考古学・文学・美術史学・民俗学・言語学・ジェンダー論など、多岐にわたる。まさに先生の問題関心の深さと、研究者ネットワークの広がりを示す顔ぶれとなった。

論考の配列については、これを時代別・地域別・専門分野別に構成するのではなく、先生のこれまでの研究業績にも関連づけて、「Ⅰ衣装」「Ⅱ信仰」「Ⅲ古代史の諸相」「Ⅳ女性」「Ⅴ文化の交錯」の五つのテーマ別にする

ことにした。

「I衣装」には、先生のメインの研究テーマである衣服・異性装・図像・ジェンダー表象に関わる論考を配置した。「II信仰」では、先生が着手された太子信仰研究などのさらなる深化をめざす論考や、海域や西洋における信仰・祭祀に関わる研究業績を集めた。「III古代史の諸相」の論考は、先生の専門分野である日本古代史の研究者が、王権・都城・祭祀・伝承論などについて書きあげたものである。「IV女性」は、婚姻・出産・参政権・女性解放の問題など、先生が一貫して問題関心をもってこられた、女性史研究・ジェンダー論に関わる諸論考によって成り立つ。さらに「V文化の交錯」は、先生の交通史研究・国際交通論研究に引きつけた、異文化交流や地域論などの研究業績によって構成されている。

各論考はそれぞれの学問分野の新地平を拓く力作ばかりだと確信する。先生のみならず、多くの読者の皆様にお読みいただき、ご批判・ご指導をいただければ幸いである。

武田先生には今後ともご健康に留意され、ますますご活躍されることを、心よりお祈り申し上げます。

二〇一四年三月九日

武田佐知子先生退職記念論文集刊行世話人

市大樹・坂江渉・松下正和

序

I 衣装

平安貴族における愛のかたちと衣服のかたち……………	武田佐知子	3
——『とりかえばや』の復権——		
青い鳥と紅いスカーフ——杜甫「麗人行」の「青鳥飛去銜紅巾」をめぐる——…	矢田尚子	18
唐代侍女男装雑考……………	菅谷文則	38
『中国歴代帝后像』と南薰殿の図像……………	堤 一昭	60
帛御服と御祭服についての諸問題……………	津田大輔	75
天平章についての臆説——「天平十二年八月日」に込められた意味——…	伊藤 純	96
日本人のキリスト教受容と宣教師の装束……………	岡美穂子	112

Ⅱ 信仰

菅原道真「能書」説の諸相とその展開——古代・中世を中心に——	竹居明男	135
聖徳太子の化身説——『三宝絵』と『四天王寺御手印縁起』——	稻城正己	154
近世太子信仰の成立と天海	榊原小葉子	174
大阪天満宮の渡辺吉賢と「神酒笑姿」——平賀源内「神酒天神」の投影——	高島幸次	194
北斗七星と九曜星をともしう江戸時代の妙見画像の一例	松浦清	207
——誤謬解釈を越えて——		
近世琉球における媽祖信仰と船方衆	藤田明良	232
——那覇若狭町村の新参林氏とその媽祖像を中心に——		
多重化するローカルな祭り——浮遊する聖人——	井本恭子	266

Ⅲ 古代史の諸相

難波長柄豊碕宮の造営過程	市大樹	285
「政ノ要ハ軍事ナリ」——天武一三年閏四月丙戌詔再考——	井上勝博	304
荒ぶる女神伝承成立の背景について	松下正和	322
「風土記」開発伝承の再検討——『常陸国風土記』行方郡条——	高橋明裕	340

播磨国風土記の民間神話からみた地域祭祀の諸相	坂江 渉	354
------------------------	------	-----

IV 女性

日本古代における婚姻とその連鎖をめぐって	今津勝紀	377
近代日本における化粧研究家の誕生——藤波芙蓉の事跡をめぐって——	鈴木則子	398
小栗風葉『青春』に見る男性領域への侵犯と女性教師の周縁化	小橋玲治	426
タイ文学にみる女性の「解放」——『ワンラヤーの愛』を中心として——	平松秀樹	450
スペインの婦人参政権に関する一考察	岡本淳子	478
土地の表象を纏う——「ご当地キティ」をめぐるジェンダー表象論——	山崎明子	498

V 文化の交錯

絲綢を運んだ南海の船舶と文化	辻尾榮市	521
『浪花名所獨案内』を読む	辻尾千曉	540
一八世紀中葉の兵庫津方角会所と惣代の家	河野未央	553
——岡方惣代善八の不正事件をめぐって——		
近世中後期に見る近代アルピニズム的思考	中井祥雅	579
近代における奄美群島からの渡台者について	高嶋朋子	602

民俗世界における食の地域性と方言圏——北陸地方の雑煮に注目して——	中井精一
リンネの「帝国」と「使徒」の使命………	古谷大輔
——スウェーデンから見たテューンバリ訪日の背景——	643
	619

あとがき

執筆者紹介

あとがき

今、本書の目次を見ながら、感無量である。本書に論文を寄せてくれた三人の人々は、すべてが私の教え子というわけではなく、さまざまな研究会に集って一緒に勉強した、私の尊敬する先輩研究者であり、同僚や後輩の仲間たちである。分野も日本古代史に限らず、ヨーロッパ史もあれば考古学もあり、文学、民俗学、言語学、民族学、美術史学、女性学と、多岐にわたる。

大阪外国語大学に一九八五年に奉職してはや二九年の月日が過ぎた。私は史学科の教官として籍をおいたのである。得意な語学を武器に、やがて世界に飛び立っていかうとする学生たちに、彼らが赴いた先の国々の人から尋ねられるのは、日本の文化についてであり、日本の歴史だからという理由で、大阪外大で初めて梓が設けられた日本史の助教授として、私は赴任した。赴任当時は外国語を専攻して学ぶ学生たちに、一般教養としての日本史を教えるのが私の任務だった。

日本史を学ぼうとこころざして外大に入ってくる学生はまずいない。外国語の辞書を片手に、次の時間の授業の予習を兼ねて講義を受けにくる学生たちに、彼らが内職する手を止めて、私の話に耳を傾けてくれるよう、興味の持てる話をと、心がけて授業をしてきたつもりである。私の書いたものについて、皮肉まじりに「よくまあこうも人の気を引ける話を書くものだ」と言われたことがある。もしそうだとすればそれは、三〇年近くやむなく培われてきた、私の哀しいさかもしれない。ともあれ、必ずしも歴史が好きで、日本史が好きで……というわけではない学生たちを相手に、些かでも興味を持ってもらえるようにと、歴史学の、日本史の、おもしろさを

私なりに説いてきたつもりである。一般教養の講義だけでなく、関連科目として、「日本文化史演習」というゼミを持ち、少人数で毎年さまざまな史料をとりあげて、学生たちと議論を重ねることも出来た。

やがて大学改革が行われ、語学専修の地域文化学科と並んで一九九三年に国際文化学科が創設され、言語の学習を通じて地域の思想・歴史・社会を知るというコンセプトの比較文化講座が出来、私はそこへ所属することになった。専攻の学生も集まり、日本史や世界史を学ぶ学生たちに、専攻として卒論指導が出来るようになった。

一九九八年には博士課程も設立されて、修士から博士課程へと進む学生も出て来た。

それにしても外大の、語学の得意な学生たちの、思考ののびやかさはどうだ！歴史に進み、文学に進み、語学研究に進んだにせよ、私はゼミの学生たちの発想の豊かさ、しなやかさにしばしば舌を巻いた。語学の訓練は右脳を鍛えるとされるが、右脳はイメージ力や感覚表現力を養うというのは、誤謬説もあるにせよ語学能力との相関があるのかも思ってしまう。

さて、こうして学生や院生生活のある時期、私の研究室に集ってくれた学生の刺激を受けつつ、私はいくつかのプロジェクト、科学研究費や学内研究助成、そしてサントリー財団の助成を得て研究会を組織し、この書に集ってくれた多分野の研究者の皆さんと一緒に勉強してきた。そうした仲間たちの共同作業の成果として本書がある。そういう意味で、本書は私を刺激し、成長させてくれた仲間たちとの知の結晶なのだと言えよう。これは私の専門の日本古代史分野の専書ではない。まさに「交錯する知」の集成なのである。

結びにあたり、厳しい出版事情のなか、この論文集の刊行を引きうけ、ご尽力いただいた思文閣出版の原宏一取締役部長と、編集の労を執ってくださいった田中峰人氏にあつくお礼を申し上げたい。

武田佐知子

執筆者紹介（収録順）

武田佐知子（たけだ さちこ）→別掲

矢田 尚子（やた なおこ）

1967年生。東北大学大学院文学研究科博士後期課程修了。盛岡大学文学部日本文学科准教授。
「楚辞「離騷」の「求女」をめぐる一考察」（『日本中国学会報』第57集，2005年），「笑う教示者——楚辞「漁父」の解釈をめぐる——」（『集刊東洋学』第104号，2010年），「唐代における宮女の男装について」（武田佐知子編『着衣する身体と女性の周縁化』思文閣出版，2012年）。

菅谷 文則（すがや ふみのり）

1942年生。北京大学歴史系考古専修過程修了。奈良県立橿原考古学研究所所長。
『北周・田弘墓』（文物出版社，2009年），『三蔵法師が行くシルクロード』（新日本出版社，2013年），『騎馬楽俑考』（『中国考古学』6，2006年）。

堤 一 昭（つつみ かずあき）

1960年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程学修退学。大阪大学大学院文学研究科教授。
「大元ウルス治下江南初期政治史」（『東洋史研究』58-4，2000年），「チンギス・カン画像の“興亡”」（『石濱文庫の学際的研究——大阪の漢学から世界の東洋学へ——』平成23年度大阪大学文学研究科共同研究報告書，2012年），『グローバルヒストリーと帝国』（共著，大阪大学出版会，2013年）。

津田 大 輔（つだ だいすけ）

1972年生。甲南大学大学院日本文学研究科修士課程修了。滝川中学校・高等学校教諭。
「平安時代前期服飾復元の可能性」（『古代文化研究』16，2008年），「『西宮記』女装束条について」（『古代文化研究』17，2009年），「組掛——天皇・家元・武家をつなぐ紐——」（武田佐知子編『着衣する身体と女性の周縁化』思文閣出版，2012年）。

伊 藤 純（いとう じゅん）

1956年生。大阪市立大学文学部卒業。大阪歴史博物館学芸員。
『大阪橋ものがたり』（共著，創元社，2010年），「李王家博物館から柳宗悦の民芸運動へ——李王家博物館に学んだ人々——」（『柳宗悦展——暮らしへの眼差し——』NHKプロモーション，2011年），「法隆寺に関する一史料——中西文庫『斑鳩ミヤげ』について——」（『大阪歴史博物館研究紀要』11号，2013年）。

岡 美穂子（おか みほこ）

1974年生。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。博士（人間・環境学）。東京大学史料編纂所助教。
『商人と宣教師——南蛮貿易の世界——』（東京大学出版会，2010年），『海域アジア史研究入門』（共著，岩波書店，2008年），『海からみた歴史——シリーズ東アジア海域に漕ぎ出す第1巻』（共著，東京大学出版会，2012年）。

竹 居 明 男（たけい あきお）

1950年生。同志社大学大学院文学研究科博士後期課程中退。同志社大学文学部教授。

『日本古代仏教の文化史』（吉川弘文館、1998年）、『天神信仰編年史料集成——平安時代・鎌倉時代前期篇——』（国書刊行会、2003年）、『北野天神縁起を読む』（吉川弘文館、2008年）。

稲 城 正 己（いなぎ まさみ）

1949年生。大谷大学大学院文学研究科博士後期課程修了。光蓮寺住職。

『〈語る〉蓮如と〈語られた〉蓮如——戦国期真宗の信仰世界——』（人文書院、2001年）、「上代写経識語注釈（その十六）大般若波羅蜜多經卷第一百七十六」（『續日本紀研究』第400号、2012年）、「『法華験記』の贈与論について」（『日本宗教文化史研究』第17巻第1号、2013年）。

榊原小葉子（さかきばら さよこ）

1971年生。スタンフォード大学大学院人文科学部歴史学科博士課程修了。スタンフォード大学歴史学科講師。

「古代中世の対外意識と聖徳太子信仰——法隆寺僧顕真の言説の期するもの——」（『日本歴史』617、1999年）、「地誌としての寛文刊本『聖徳太子伝記』——近世太子信仰の展開に関する一考察——」（武田佐知子編『太子信仰と天神信仰 信仰と表現の位相』思文閣出版、2010年）、「End of a Tradition: Cosmology and Science in Japan's Last Buddhist Map,」K. Wigen, F. Sugimoto, and C. Karacas eds., *Cartographic Japan: A Reader*, University of Chicago Press, forthcoming (2014)。

高 島 幸 次（たかしま こうじ）

1949年生。龍谷大学大学院文学研究科修士課程修了。大阪大学コミュニケーションデザインセンター招聘教授、追手門学院大学客員教授。

「大阪天満宮と大將軍信仰——星辰信仰と抱瘡神——」（大阪天満宮史料室編『大阪天満宮史の研究』2、思文閣出版、1993年）、「天神祭の成立と発展」（大阪天満宮文化研究所編『天神祭 火と水の都市祭礼』思文閣出版、2001年）、「太子信仰と天神信仰——真宗史の視点から——」（武田佐知子編『太子信仰と天神信仰 信仰の表現と位相』思文閣出版、2010年）。

松 浦 清（まつうら きよし）

1959年生。東北大学大学院文学研究科博士前期課程修了（美学・美術史学専攻）。大阪工業大学工学部総合人間学系教室准教授。

「正面向きで直立する異色の東帯天神像について」（武田佐知子編『太子信仰と天神信仰——信仰と表現の位相——』思文閣出版、2010年）、「星曼荼羅の構成原理と成立について」（津田徹英編『仏教美術論集2 図像学Ⅰ——イメージの成立と伝承（密教・垂迹）——』竹林舎、2012年）、「片袖縁起」における時の視覚化について」（関西軍記物語研究会編『軍記物語の窓 第四集』和泉書院、2012年）。

藤 田 明 良（ふじた あきよし）

1959年生。神戸大学大学院文化学研究科博士課程単位取得退学。天理大学国際学部教授。

『海から見た歴史——東アジア海域に漕ぎ出す1』（共著、東京大学出版会、2013年）、「航海神——媽祖を中心とする東北アジアの神々——」（桃木至朗ほか編『海域アジア史研究入門』岩波書店、2008年）、「東アジアにおける島嶼と国家——黄海をめぐる海域交流史——」（村井章介ほか編『日本の対外関係四——倭寇と「日本国王」——』吉川弘文館、2010年）。

井 本 恭 子 (いもと やすこ)

1963年生。大阪外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了。大阪大学大学院文学研究科准教授。
共著『ヨーロッパ・ことばと文化：新たな視座から考える』（大阪大学出版会、2013年）、「ex voto の謎——セディロの聖コンスタンティヌスに返礼する人びと——」（『AULA NUOVA イタリアの言語と文化』6、2007年）、「ローカルなものの様相——オルゴゾロの事例から——」（『待兼山論叢』46、2012年）。

市 大 樹 (いち ひろき)

1971年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。大阪大学大学院文学研究科准教授。
『飛鳥藤原木簡の研究』（塙書房、2010年）、『すべての道は平城京へ——古代国家の〈支配の道〉——』（吉川弘文館、2011年）、『飛鳥の木簡——古代史の新たな解明——』（中央公論新社、2012年）。

井 上 勝 博 (いのうえ かつひろ)

1961年生。神戸大学文化科学研究科単位取得退学。武庫川女子大学非常勤講師。
共著『日本史における公と私』（柏書房、1996年）、共著『王と公』（柏書房、1998年）、「日本古代における「公」と王権」（『日本史研究』440、1999年）。

松 下 正 和 (まつした まさかず)

1971年生。神戸大学大学院文化科学研究科単位取得退学。近大姫路大学教育学部こども未来学科講師。
『水損史料を救う 風水害からの歴史資料保全』（編共著、岩田書院、2009年）、『新修神戸市史 歴史編Ⅱ古代・中世』（共著、神戸市、2010年）、「貞観10年の播磨国大地震」（『いひほ研究』4、2012年）。

高 橋 明 裕 (たかはし あきひろ)

1965年生。立命館大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。立命館大学・天理大学非常勤講師。
「古代の猪名地方における猪名部と猪名県」（『地域史研究』29-3、2000年）、「氏族伝承と古代王権」（『歴史評論』611、2001年）、「高校・大学の歴史教育における地域遺産の活用」（『立命館高等教育研究』12、2012年）。

坂 江 渉 (さかえ わたる)

1959年生。神戸大学大学院文化科学研究科単位取得満期退学。博士(文学)。神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター研究員。

坂江渉編『風土記からみる古代の播磨』（神戸新聞総合出版センター、2007年）、坂江渉編『神戸・阪神間の古代史』（神戸新聞総合出版センター、2011年）。

今 津 勝 紀 (いまづ かつのり)

1963年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学。岡山大学大学院社会文化科学研究科教授。

『日本古代の税制と社会』（塙書房、2012年）、「日本古代の村落と地域社会」（『考古学研究』50-3、2003年）、「古代播磨の『息長』伝承をめぐって」（『日本史研究』500、2004年）。

鈴 木 則 子 (すずき のりこ)

総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程学位取得修了。奈良女子大学研究院生活環境科学系生活文化学領域教授。

『日本梅毒史の研究 医療・社会・国家』（共編、思文閣出版、2005年）、『江戸の流行り病 麻疹騒動はなぜ起こったのか』（吉川弘文館、2012年）、「江戸時代の女性美と身体管理」（赤阪俊一・柳谷慶子編『ジェンダー史叢書8 生活と福祉』明石書店、2010年）。

小橋 玲 治（こはし れいじ）

1981年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。甲南高等学校非常勤講師。
The “Japanized” Translation of *Jane Eyre*（『大阪大学・チューラーロンコン大学・国際ワークショップ「日本・タイ相互交流の文学研究のために」報告・論文集」2011年）、「日本から海を渡った女教師たちとその表象」（『コンフリクトの人文国際研究教育拠点』セミナー第2回「世紀転換期の日英における移動と衝突——課報と教育を中心に——」報告書』2013年）、「清子は蒙古正の家庭教師となる——大月隆『臥龍梅』（1906年）に見る女性家庭教師表象の一側面——」（『待兼山論叢文学篇』47、2014年予定）。

平松 秀 樹（ひらまつ ひでき）

1968年生。タイ国チューラーロンコン大学大学院修士課程修了、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。大阪大学文学部・外国語学部およびチューラーロンコン大学大学院非常勤講師。「ククリット・ブラモート『シー・ペンディン（王朝四代記）』と“クンラサトリ”——タイ近代女子教育の日本との関わりと考察とともに——」（『待兼山論叢』42、2008年）、「東南アジアの日本文学」（日本比較文学会編『越境する言の葉——世界と出会う日本文学——』日本比較文学会創立六十周年記念論文集、彩流社、2011年）、「[タイ] 新しいヒロイン像——日本・韓国表象とともに——」（『地域研究』総特集「混成アジア映画の海」13-2、2013年）。

岡 本 淳 子（おかもと じゅんこ）

1961年生。大阪外国語大学大学院言語社会研究科言語社会専攻博士後期課程修了。博士（言語文化学）。大阪大学言語文化研究科助教。
「もうひとつの歴史を叙述するアントニオ・ブエロ・バリエホの戦略：国家のイデオロギーを可視化する『バルミー博士の二つの物語』の多層ナラティブ」（*EXORIENTE* 11、2004年）、「アントニオ・ブエロ・バリエホの *El tragaluz* における記憶と歴史」（*HISPÁNICA* 49、2005年）、「アントニオ・ブエロ・バリエホの『ラス・メニーナス』におけるベラスケスの絵画」（*Estudios Hispánicos* 37、2013年）。

山 崎 明 子（やまさき あきこ）

1967年生。千葉大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程修了。奈良女子大学研究院生活環境科学系准教授。
『近代日本の「手芸」とジェンダー』（世織書房、2005年）、共著『女性とたばこの文化誌 ジェンダー規範と表象』（世織書房、2011年）、共著『ひとはなぜ乳房を求めるのか 危機の時代のジェンダー表象』（青弓社、2011年）。

辻 尾 榮 市（つじお えいいち）

1949年生。大阪市立大学大学院文学研究科前期博士課程修了。大阪府立大学大学院人間社会学研究科客員研究員。
『「対馬國卜部亀卜之次第」攷』（地域歴史民俗考古研究所、2010年）「舟・船棺をつかう埋葬法」（『人文学論集』29、2011年）、「濱松歌國の『大石摺櫻花短冊』」（『地域学研究』2、2012年）。

辻 尾 千 暁（つじお ちあき）

1980年生。大阪大学大学院言語社会研究科博士前期課程修了。

「明治初期「買物案内」にみる洋装化と都市（上）」（『郵政考古紀要』47, 2009年）, 「明治初期「買物案内」にみる洋装化と都市（中）」（『郵政考古紀要』49, 2010年）, 「明治初期「買物案内」にみる洋装化と都市（下）」（『郵政考古紀要』51, 2011年）。

河 野 未 央（こうの みお）

1976年生。神戸大学大学院文化学研究科修了。博士（学術）。近大姫路大学教育学部助教。

松下正和・河野未央編『水損史料を救う——風水害からの歴史資料保全——』（岩田書院, 2009年）, 「海辺の支配と神戸～尼崎」（辻川敦・大国正美編著『神戸～尼崎海辺の歴史古代から近代まで』神戸新聞総合出版センター, 2012年）, 「近世初期における海上交通役の編成——摂津・和泉・播磨三カ国沿海地域を素材として——」（『ヒストリア』235, 2012年）。

中 井 祥 雅（なかい よしまさ）

1943年生。大阪外国語大学大学院言語社会研究科博士前期課程修了。大阪大学大学院文学研究科・文化形態論博士後期課程。

「ワーズワースとアルピニズムの黎明」（『関西学院大学山岳会会報』, 2008年）, 「信仰登山から近代アルピニズムへの変遷——立山を舞台に——」（修士論文, 2010年）。

高 嶋 朋 子（たかしま ともこ）

1975年生。大阪外国語大学大学院言語社会研究科博士後期課程単位取得退学。東京外国語大学留学生日本語教育センター非常勤講師。

「初等教育における内台共学——「在台内地人」教育からの照射——」（『近代日本と台湾』創成社, 2011年）, 「大島農学校をめぐる人的移動についての試考」（『日本語・日本学研究』3, 東京外国語大学国際日本研究センター, 2013年）, 『瀬戸内のシマグチ』（瀬戸内のシマグチ編集委員会, 2013年）。

中 井 精 一（なかい せいいち）

1962年生。大阪外国語大学大学院外国語学研究科修了。博士（文学）（大阪大学）。富山大学人文学部教授。『社会言語学のしくみ』（研究社, 2005年）, 『都市言語の形成と地域特性』（和泉書院, 2012年）, 『都市と周縁のことは』（共著, 和泉書院, 2013年）。

古 谷 大 輔（ふるや だいすけ）

1971年生。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。大阪大学大学院言語文化研究科准教授。

『歴史的ヨーロッパの政治社会』（共著, 山川出版社, 2008年）, 『スウェーデンを知るための60章』（共著, 明石書店, 2009年）, 「バルト海帝国とスコネの「スウェーデン化」」（『IDUN』vol. 15, 2003年）。

◎編者紹介◎

武田佐知子（たけだ さちこ）

1948年10月2日、東京都生まれ

1971年3月 早稲田大学第一文学部 卒業

1977年3月 早稲田大学大学院文学研究科史学専攻修士課程修了

1985年3月 東京都立大学大学院人文科学研究科史学専攻博士課程修了
同 文学博士

1997年1月 大阪外国語大学教授

2007年10月 大阪大学理事・副学長

2009年10月 大阪大学文学研究科教授、現在に至る

〈専門分野〉

日本史学 服装史 女性史

〈主著〉

『古代国家の形成と衣服制——袴と貫頭衣——』（吉川弘文館、1984年）

『信仰の王権 聖徳太子——太子像をよみとく——』（中公新書、1993年）

『衣服で読み直す日本史——男装と王権——』（朝日選書、1998年）

『娘が語る母の昭和』（朝日選書、2000年）

〈受賞〉

1985年 サントリー学芸賞 思想歴史部門

1995年 濱田青陵賞

2003年 紫綬褒章

こうさく ち いしやう しんこう じょせい
交錯する知——衣装・信仰・女性——

2014(平成26)年3月9日発行

定価：本体12,000円(税別)

編 者 武田佐知子

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-751-1781(代表)

装 幀 上野かおる(鶯草デザイン事務所)

印 刷 亜細亜印刷株式会社
製 本